

『浜辺の猿』

作 .. 佐藤剛史

△登場人物△

- 恩田原君枝 (三十四) 東京都大学霊長類学研究室助教
安西瞳 (二十四) 東京都大学霊長類学研究室大学院生
岩井義郎 (五十九) 旅館「岩井館」の主人
岩井美紗 (二十八) 義郎の娘
岩井康介 (三十三) 義郎の息子
土肥垣里美 (二十七) 美紗の友人
村雨すみれ (四十二) 商工観光課課長
恩田原芳枝 (五十七) 君枝の母、旧姓木下

△一場△

舞台はある港町、下伊豆市戸崎町の旅館「岩井館」の休憩室。旅館の奥へ通じる出入り口、玄関に通じる出入り口、厨房などへ通じる出入り口などいくつか出捌け口がある。休憩室の中央には低いテーブルと椅子・ソファーなどがあり、隅には機材の入った荷物がいくつか積み上げられている。この休憩室からは湾内が一望できる。湾内には島が見える。その島は地元では「猿ヶ島」と呼ばれている。

明かりがつく。

六月。大潮の前日。夕刻。

休憩室では恩田原と安西が「サルサル音頭」を踊っている。土肥垣が手拍子しながら見ている。

恩田原・安西

今から五百万年前は
人と猿とは似たもの同士
ウータン ゴリラに チンパンジー
サルサルサルサル サル音頭
人も結局 サルなのだ

拍手する土肥垣。

土肥垣 面白いですね。

安西 うちの大学の先輩達で作ったんですよ。

恩田原 当時は「百万年前」って歌ってたらしいけど、私たちの代の

時「五百万年前」に修正したのよ。
安西　そろそろ「七百万年前」にしよって話も出てます。
恩田原　そうなの？
土肥垣　伝統があるんですね。
恩田原　伝統って言うてもねえ。
安西　今じゃ飲み会の余興でやるくらいです。
恩田原　飲み会でも最近やらないわよ。
安西　「サルサル音頭」という名前もねえ。
恩田原　安易でしょ。
土肥垣　どうせなら「サルサ」のリズムで「サルサル・サルサ」みたいな。

間。

三人、笑う。

土肥垣はテーブルの上の名刺を手取る。

土肥垣　えーつと、東京都大学（とうきょうとだいがく）

安西　東京都大学（ひがしきょうとだいがく）です。

土肥垣　ああ。

恩田原　よく間違えられるのよ。

土肥垣　・長類学研究室。

安西　霊長類。

土肥垣　はあ。

恩田原　猿のことです。

土肥垣　ああ。猿。霊長類。猿。霊長類。

安西　ちようどこの「サルサル音頭」が出来た頃、海藻を取って食べる猿がいるって話題になって。うちの大学の研究チームが来たんです。

土肥垣　ここに？

安西　ええ。そのすぐ後、町がああ島に施設を作ったこの辺りの猿を連れて行ったんです。

土肥垣　それが「おさるさんパーク」だったんですね。

安西　もう閉鎖しちゃってますけど。

恩田原　猿の島流しよ。

土肥垣　じゃあ、その島流しの猿が戻ってきたってことですか？

安西　今回、土肥垣さんが目撃した猿は多分、オスです。

土肥垣　二匹とも？

安西　はい。通常、大人になった猿のオスは数匹を残して群れの外に

出るんです。

土肥垣 はあ。

安西 今回、その群れを離れたオスザルが居場所を捜して新天地に渡った、と。

土肥垣 島に居場所はなかったんですか？

恩田原 群れに入れないオスは群れを離れるんです。しかし、孤立した島では限界がある。「おさるさんパーク」があったころは餌に不自由じゃありませんでしたが、今はちょうど小猿も生まれる季節です。餌不足にでもなっているのかもしれない。

土肥垣 なるほど。わかるようなわからないような。私はまた、二匹で浅瀬を渡っていたんで駆け落ちでもしたのかな、なんて。

安西 それはそれでロマンティックですけど、相手は猿ですから。

土肥垣 ええ。猿でした。

恩田原 今回、特に興味があるのは、浅瀬を渡るときに二足歩行していたということですよ。

土肥垣 ええ。人間みたいでした。

安西 だから余計駆け落ちに見えたんでしょね。

土肥垣 ああ。

恩田原 私が今研究しているのは、二足歩行をする猿について、なのです。

土肥垣 いるんですか？

恩田原 時と場合によって二足歩行する猿はいるんです。その「二足歩行する条件」を調べることによって、つまりは人間の祖先が二足歩行を始めた必然性がわかると思うのです。それが

安西 ありがとうございます。

奥の出入り口に美紗がコーヒを持って立っている。

美紗 すみません、お話中に。

恩田原 いえ。

美紗 お待たせしました。

恩田原 どうも食後にコーヒー飲まないで調子出なくて。

美紗 かなり調子よく熱弁されましたけど。

恩田原 いや、お恥ずかしい。

美紗 里美さんはいつもの。

土肥垣 ありがとうございます。

安西 いつもの、って？

美紗 ミルクです。

安西 コーヒー、苦手なんですか？
土肥垣 ええ、だって苦いんですもの。それに、飲むとお腹の調子が悪くなってしまうので。

恩田原はコーヒーを、土肥垣はミルクをうまそうに飲む。
美紗と安西はそれを見ている。

美紗 そういえば、村雨さん遅いですね。

安西 七時って言っていましたよね。

美紗 ええ。

土肥垣 村雨さんって？

美紗 町の商工観光課の課長さん。

土肥垣 ああ。

美紗 もう町じゃないか。

恩田原 合併したんですよね。

美紗 ええ、下伊豆市と。

恩田原 「海を渡る猿」を観光の目玉に、とか考えてるんでしょうけど、そう簡単にはいきませんよ。

美紗 でも、そうなってくれると、うちは助かりますね。

安西 旅館が。

美紗 ええ。

恩田原 やっぱ「おさるさんパーク」閉鎖が。

美紗 大きいです。

安西 今じゃあ無人島ですね。

美紗 まあ、無人ですね。

恩田原 猿はいますけど。

土肥垣 「お猿天国」みたいな。

間。

土肥垣 いや。続けてください。

美紗 目玉でも無いと、だんだん観光客の足も遠のいていきます。このままだとこの旅館も、

恩田原 やめてしまうんですか？

美紗 私も働きに出ようか、なんて。

安西 女将さんが出ちゃったら、ねえ。

美紗 「女将さん」ってそんなに歳変わらないですよ。きっと。

土肥垣 新しい女将さんが来れば。

恩田原 来るんですか？

美紗 父が再婚でもしてくれれば……あ、さっきの話。

安西 どの？

美紗 猿が立って歩くっていう。

安西 ああ、先生の。

美紗 そうやって歩いてると、そのうち進化して、人間になっちゃうんですか？

土肥垣 そう。それ、私も思ったの。猿から人間に。

恩田原 そうはなりません。

美紗 そうなんですか？

恩田原 猿と人間は共通の祖先から分かれた兄弟みたいなものです。

別々の進化をたどってますからニホンザルの進化した形が人間というわけではありません。

美紗 でも、二本足で歩いてたら。

恩田原 まあ、二本足で歩く猿になるでしょうね。

土肥垣 「猿の惑星」みたいな。

間。

土肥垣 すみません。

安西 そうですね。

恩田原 イメージとしてはありますね。

美紗 なるほど。人間みたいに見えるけど、猿ですものねえ、あれ。土肥垣 あの映画、英語でしゃべってたけど、ニホンザルだとやっぱ

り日本語でしゃべるようになるのかしら。

美紗 そうね。

恩田原 まあ、あれはあくまで映画の話ですから。

美紗・土肥垣 ああ。

岩井義郎が奥からやってくる。

義郎 どうでした？ 夕飯は。

恩田原 とてもおいしかったです。

安西 海の幸いっぱい。

義郎 それは、よかった。ところで、先生。

恩田原 はい。

義郎 先生のお父さんも猿の研究されてたんじゃ。

恩田原 ええ。猿ヶ島の初期のメンバーにいたはずですよ。

義郎 やつぱり。「猿の研究してる恩田原」ってどこかで聞いた気がしてたんですよ。

安西 ご存知なんですか？

義郎 ええ、覚えてますよ。私がまだ父の手伝いで調理場で働き始めた頃、大学の研究グループが泊まりに来ましてね。何かね、盆踊りみたいなのを踊ってました。

安西 教授たちですよ。

土肥垣 サルサル。

義郎 あの頃は、まだ農家がたくさんあって、作ってたリンゴを猿に食べられちゃうんで困ってたんです。そこに大学の人たちが来たんで、これ幸いと、猿たちを島に移したようなものでね。猿の島流しだ、ありや。でもそのおかげで観光客が

美紗 お父さん、厨房の方はいいの？

義郎 ああ。ちよつと失礼。

義郎は奥へ去る。

美紗 すみませんね、話し始めると長くなるんです。

義郎、奥から戻ってくる。

義郎 恩田原さん。

恩田原 はい。

義郎 さっき言った、カメラを取り付ける場所。一階半のトイレなんかどうですかね。

恩田原 はい。一階半？

義郎 一階と二階の間の踊り場のところから……ご案内します。

恩田原 お願いします。

義郎と恩田原は奥へ去る。

安西 一階半？

美紗 踊り場から横に建て増したところがあつて。

安西 それで、一階半。

美紗 この旅館自体が山の斜面にあるんで、建て増しすると素直にはいかないんです。

土肥垣 それにしても建て増ししすぎよ。

安西 おとうさま、面白そうな方ですね。

美紗 たまにお客さんが、それも若い女性客が来ると張り切っちゃつて、お客さん相手にべらべらしゃべりすぎるんですよ。

土肥垣 おじさん、寂しいのよ。みっちゃんも相手してくれないから。

美紗 だったら早く再婚してほしいわよ。

安西 そういう話はあるんですか？

美紗 ええ。

土肥垣 この間、お見合いしたのよね。

安西 それで、新しい女将さんが、つて。

美紗 里美さんもしたでしょ。お見合い。

土肥垣 私のはいいのよ。で、どうだったの？

美紗 うん。向こうは乗り気なんだけど。ねえ。

土肥垣 ああ、おじさんが。

安西 つまりその方が旅館の女将候補というわけですね。

美紗 別に女将やってほしいっていうより、お父さんのそばにちゃん

とした人がいてくれれば、私が安心していうことなんだけど。

安西 安心して働きに？

美紗 ……ええ。

土肥垣 みっちゃん、勉強してたくさん資格持ってるのよ。

安西 すごいですね。

美紗 見ての通り、暇なんで。

安西 ああ。

土肥垣 でも、おじさんがその気にならなきゃ、資格ももつたいないわね。

美紗 そうなのよ。いつまでもこのままじゃ…

土肥垣 何？

奥で電話が鳴る。

美紗 すみません。

美紗は奥へ去る。

安西 何か大変そうですね。

土肥垣 ええ。

間。

安西 さつき、お見合いつて。

土肥垣 え？

安西 土肥垣さんもお見合いを？

土肥垣 ええ。私もしたんです。

安西 そうですか。どうだったんですか？

土肥垣 それっきりです。

安西 はあ。

間。

土肥垣 安西さんは、恋人とかいらつしやるんでしょ。

安西 え？ ええ。いるというか、何というか……

間。

土肥垣 ……サル

安西 サル？

土肥垣 いえ、さっきのサル、サル、

安西 あ。教えましょうか？ サルサル音頭。

土肥垣 え？

安西 そういうことではなく？

土肥垣 そうですね。教えていただけます？

安西は土肥垣に手取り足取り「サルサル音頭」を説明する。

美紗が電話の子機で話をしながら奥から来る。

美紗 あ、その堤防です。ええ。今行きますけど、その前の砂利を敷

いた空き地の

下手へ通り過ぎる美紗。

安西と土肥垣は美紗を目で追った後、再び「サルサル音頭」に

戻る。

下手から戻ってくる美紗。

美紗 村雨さん、いらつしやいましたよ。

安西 じゃあ、先生呼びに行ってください。

美紗 こちらの部屋にお通ししておきますね。

安西 はい。お願いします。

美紗は下手へ、安西は奥へ去る。
残された土肥垣は一人で「サルサル音頭」の復習をしている。
下手から村雨が入ってくる。
踊っている土肥垣を見ている村雨。
村雨に気付く土肥垣。

土肥垣 あ。

村雨 どうも。

土肥垣 村雨さん？

村雨 はい。

土肥垣 どうぞ。

土肥垣は村雨に席を勧める。

座った村雨は土肥垣にも席を勧める。

土肥垣も座る。

村雨 すみません。私、方向音痴で。迷って遅くなってしまいました。

土肥垣 大丈夫ですよ。私も方向音痴ですから。

村雨 そうですか。

笑いあう二人。
間。

村雨 で、猿が浅瀬を渡る、という話なんですが。

土肥垣 ええ、ちょうどひと月前の大潮の時の事です。満月の月明かりの中、浅瀬を渡る二つの影。

村雨 心中ものみたいですね。

土肥垣 ええ。しかしその二つの影は猿だったのです。

村雨 猿の駆け落ちですか。

土肥垣 私も初めはそう思いました。しかし、実はその猿は男同士だったのです。

村雨 ……そういう趣味の猿なんですか？

土肥垣 猿の趣味まではわかりません。とにかく彼らは新天地を目指して旅立ったのです。

村雨 その現象が、今月も起きる、というような話を聞いたのですが。土肥垣 はい。明日がちょうど大潮です。潮が引いて浅瀬が渡れるく

らいになります。その時、再び猿たちが新天地を求めて海を渡ってくるでしょう。

村雨 おお。……単刀直入にお聞きします。

土肥垣 はい。

村雨 これは観光の目玉になりますか？

土肥垣 なったらいいですね。

間。

村雨 ええつと。

村雨はテーブルの上の名刺を見る。

村雨 恩田原先生。

土肥垣 いいえ。

村雨 ああ。助手の方。

土肥垣 いいえ。

村雨 え？

土肥垣 私は目撃者です。

村雨 目撃者？

土肥垣 ひと月前、海を渡る猿を目撃した、目撃者。

村雨 ああ。

安西が恩田原を連れて奥から戻ってくる。

安西 お待たせしてすみません。

村雨 先生？

恩田原 私が東京都大学の恩田原です。

村雨 私、「下伊豆市戸崎支所商工観光課課長」の村雨すみれです。

恩田原、安西、村雨はあいさつする。

土肥垣 立ち話もなんですから。どうぞ。

四人は座る。

土肥垣 女将さん、お茶遅いわね。ちよつと見てきます。

土肥垣は奥へ去る。

安西 今の方は目撃者で。
村雨 ええ。目撃した時の話は聞きました。

安西 そうですか。
村雨 なかなか、興味深い光景が思い浮かびました。話を聞いているだけで、こう、うきうきした気分。

恩田原 勘違いされるといけませんので、初めに申し上げておきます。

村雨 はい。

恩田原 今回のように猿は毎月毎月渡ってくる、というわけではありません。

村雨 といいますと？

恩田原 ですから、観光の目玉にはなりませんよ、と。

間。

村雨 いやあ、先生、これは一本先手を取られましたな。

恩田原 いやいや。

村雨 ご存知とは思いますが、戸崎町は一昨年合併しまして、下伊豆市に吸収されたわけです。しかし、その過程で猿の引き上げ計画が頓挫しました。

恩田原 引き上げ費用を巡って揉めた、と聞いてます。

村雨 そうなんです。下伊豆の方は合併したらその辺の費用含めて再開発を、と言ってたんですが、合併したら「効率化」を言い訳に見直しだって言い出して。

恩田原 そんなもんですよ。

村雨 なかなかうまくいきませんよ。

村雨はカバンから書類を出す。

安西 それは？

村雨 当方の計画書です。

村雨から渡された書類に目を通す恩田原と安西。

村雨 こちらとしても、毎月毎月猿に渡ってこられては、以前のよう

に猿害が心配なんです。あ、「猿害」というのは「猿の害」で猿が

恩田原 わかります。

村雨 はい。そこで、渡ってきた猿を捕獲して、再び島に送る、とい

うことを考えてみました。こうすれば、海を渡れる猿が数匹だったとしても、その猿に何度も渡ってもらえば、それを見に観光客が集まる。厄介もの扱いだった猿ヶ島が再び注目され、下伊豆の人たちの鼻をあかせます。さらに猿害対策にもなつて、一石二鳥。いや三鳥。

恩田原 楽観的すぎませんか？

村雨 いえ、これは専門家の意見書にもありますように、地域復興事業としても

恩田原 専門家、つて私たちでは不足なんですか？

村雨 いえ、「おさるさんパーク」は東京都大の研究でしたから、今回先生たちに来ていただいたわけです。が、当時の研究者の方々にもご意見をいただこうと

恩田原 この人たちですか。

村雨 ええ、日本平モンキー・センターの（書類に目を通す）末吉教授と、恩田原：：え？

安西 教授ですよ。

村雨 先生のご親戚で？

恩田原 この人たちは、野生環境での猿の行動に関しては素人同然です。研究室の中の猿の行動しかわかっていません。

村雨 しかし、「おさるさんパーク」はこの方達が

恩田原 あれは、無理やり猿を島に閉じ込めたわけですから、一種の研究室だったから成り立っていた研究です。

村雨 でしたら、今回はその研究室である島の話ですし。

恩田原 ：：この三年の間に島の猿は野生化しました。

村雨 しかし、

恩田原 野生化させてしまったのは市の責任でもあるんですよ。

村雨 ええ、下伊豆市が責任もってやるって言ったのに

恩田原 合併したら一緒。連帯責任です。

村雨 まあ、そう言われますと：：

恩田原 今回はまだ調査を始めたばかりです。その段階でこのような計画を出されたのでは迷惑になります。今日のところはお引き取りください。

恩田原、立ち上がる。

安西 先生。

恩田原 私、忙しいので。

村雨 先生、どちらへ。

恩田原 一階半のトイレへ。

恩田原、奥へ去る。

村雨 あのだ。

安西 この恩田原教授というのは、先生のお父さんなんです。

村雨 それで名前が。

安西 でも、教授とは研究方法で対立してるんです。うちの先生は、「野生の猿を観察しなければ真実は何もわからない」という立場で。

村雨 なるほど。

安西 つい先日の学会でも衝突して。学会の会場で「勘当だ！」って。

村雨 お父さんの教授が？

安西 はい。学会でもいろんな意味で有名です。

村雨 まずいことしてしまいました？

安西 いえ。ちよつと行ってきました。

村雨 はい。

安西、奥へ去る。

村雨 「いつかいはん」って、どこ？

残った村雨は資料を手取る。

資料を入れてきた封筒にメッセージを書き始める。
荷物を抱えた康介が下手からやってくる。

村雨 あ、お客さん。

康介 え？

村雨 少々お待ちください。

康介 あのだ。

村雨 女将さくん。お客さんですよ。

村雨は上手へ去る。

残った康介はテーブルの上の資料を覗く。

康介 さる？

美紗が奥から来る。

美紗 お兄ちゃん。
康介 おお。
美紗 お客さんは？
康介 え、っと。
美紗 今、声が。
康介 うん。その人は、お客さん？
美紗 え？ 誰？
康介 まあ、いいや。
美紗 よくないでしょ。お客さん来たんでしょ。
康介 そう。お客さんは来てたよ。
美紗 どこに？
康介 さっき外で会って駐車場教えたから、車置いたらこっち来るだ
ろ。
美紗 そう。予約は入ってないけど助かるわ。で、お兄ちゃんは？
康介 帰省。
美紗 ふうん。最近は何やってるの？
康介 まあ、いろいろと。
美紗 まだ「愛川遼が」とか言ってるの？
康介 何言ってるんだ。愛川遼さんと共演出来ただけでもすごいんだぞ。
美紗 共演、たったって、蹴り入れられるチンピラの役を一度やっただ
けでしょ。
康介 馬鹿。蹴り入れてくる相手が遼さんだぞ。
美紗 で、今は仕事、何やってるの？
康介 今、ちようどオフなんだ。
美紗 いつもオフじゃないの。
康介 ……俺の部屋は？
美紗 え？
康介 俺の部屋は、今どこ？
美紗 さあ？
康介 さあ、って。
美紗 東館、二号棟の「葵の間」に荷物は全部突っ込んであるから。
康介 あそこじゃ、全部入れたら狭くて寝られないだろ。
美紗 だったらあのあたりの適当な部屋に布団持ってって寝たら。
康介 相変わらず客いないのか、この旅館は。
美紗 しようがないじゃないか。猿ヶ島、閉鎖しちゃってからは。
康介 そういえば、これ（資料を見る）、猿。
美紗 大学の先生が来てるのよ。
康介 じゃあ、さっきの人。

美紗 会ったの？
康介 女の人だったけど。
美紗 そう。その人。
康介 へえ。

芳枝が下手からやってくる。

芳枝 すみません。

康介 あ、さつき言ってった飛び込みのお客さん。

美紗 いらっしやいませ。

芳枝 あの、先日お電話した

美紗 木下さん？

芳枝 はい。

康介 飛び込みでもないのか。

芳枝 突然でご迷惑では？

美紗 いいえ。大歓迎です。でも連絡いただければ。

芳枝 もっと後で来ようと思ってたんですけど。締め切りより早く原稿あげちゃったんで。どうしようかなって迷いながら、結局来てしまいました。

康介 作家さんですか。私、女将の兄で岩井康介と申します。東京で俳優をしています。

芳枝 あら、すごいお兄さんがいらっしやるのね。

美紗 売れない俳優ですよ。

康介 こら。私もいい作品に出会えたら、なんて常々思っているんですけれども。先生はどのような作品を。

芳枝 作品って。海外の学術書なんかの翻訳を。

康介 学術書……

美紗 木下さんは、三十年くらい前、ここに泊まった事があるそうなの。それで、「まだ旅館やってるか」って問い合わせがあったの。

康介 そうでしたか、ありがとうございます。この旅館もお客が少なくて困ってたとこなんですよ。

美紗 お兄ちゃん！

上手から、恩田原が土肥垣を連れて来る。

土肥垣 やつとたどり着いた。

恩田原 何度も来てるんじゃないんですか？

美紗 里美さん、また、迷ったの？

土肥垣 だってね。あ！ お兄さん。
康介 久しぶり。

恩田原 あ！
康介 どちら様で？

芳枝 あら。

康介 そっち？

恩田原 何でいるのよ。

芳枝 ちよつと。

美紗 先生とお知りあいなんですか？

恩田原 ……母です。

美紗 え？ でも木下って。

芳枝 仕事上は旧姓を使ってるので。

恩田原 じゃあ、今日は仕事？

芳枝 違うわ。

恩田原 突然連絡もなしに。

芳枝 だって、連絡したら「来るな」って言うでしょ、君ちゃん。

恩田原 だからその「君ちゃん」っていうのやめてよ。もう子供じゃない……

恩田原は美紗、康介、土肥垣がいることに気付く。

恩田原 お母さん、ちよつと。

芳枝 何。

恩田原 すみません。

恩田原は芳枝を連れて下手へ去る。

康介 追い返されちゃうのかな。

美紗 宿泊の手続きだけは、先にしてもらったところ。

美紗も下手へ去る。

康介と土肥垣が残る。

康介 行っちゃったよ。

土肥垣 ええ。

康介 また、迷ってたの？

土肥垣 ええ。

康介 相変わらず方向音痴なんだ。

土肥垣 ええ。
康介 あ、久しぶりで緊張してる？
土肥垣 そうかな。
康介 まだ、こっちにいろの？
土肥垣 家の工場手伝ってて。
康介 親孝行だね。
土肥垣 そんな。
康介 俺、いまだに親不孝者。
土肥垣 愛川遼の『無情の狼、新宿に行く』のDVD 買いました。
康介 あの俺、かっこ悪いだろ。チンピラ役で。
土肥垣 いえ。知ってる人が出てるっていうだけで、すごいなって思
っちゃって。もう出ないんですか？
康介 最近はあるまり映画の仕事は入らなくって。
土肥垣 そうなんですか。
康介 結婚式の司会なんかしてる、かな。
土肥垣 へえ。
康介 そっちの方がお金になったりするしね。
土肥垣 じゃあ、今ちようど忙しい時期なんじゃ。ジューンブライド
：
康介 ああ。…でもお金だけが人生じゃないしね。
土肥垣 そうですね。
康介 他人の結婚式ばかり見慣れてくるのも、寂しいものだよ。
土肥垣 そうですか。
康介 たまには故郷の空気吸って、ゆっくりしたい時もあるじゃない。
土肥垣 ゆっくりしてってください。
康介 まあ、自分の家だし。
土肥垣 そうですね。
康介 でも、旅館だから、たまにはお客気分もいいかな。
土肥垣 そうですよ。お食事頼んできましようか？
康介 風呂も入れるのかな。
土肥垣 じゃあ、お風呂にします？ それともお食事…
康介 風呂にしようかな。
土肥垣 はい。

土肥垣、奥に去ろうとする。
義郎が奥からくる。

土肥垣 あ、お父さま。

義郎　ん？
土肥垣　いえ。

土肥垣、奥に去る。

義郎　何だ、帰ってきてたのか。
康介　うん。

間。

義郎　仕事はどうなんだ。
康介　まあまあ。
義郎　そうか。

間。

康介　荷物、置いてくるよ。

義郎　今は東館の
康介　美紗から聞いた。

そうか。

康介　何とかしたら？　この迷路。

義郎　お前に言われる筋合いは無い。

康介　里美ちゃん、また迷ってたよ。

義郎　ああ。あの子はいつもそうだ。

康介　建て増し建て増しじゃ、俺だって久々に来たら迷いそうだよ。
義郎　なら、もっと頻繁に帰ってくりゃいいだろ。

康介　そうだね。

康介、カバンを持って上手に去ろうとする。
美紗が下手から戻ってくる。

康介　そうそう。親父もそろそろ身を固めたら。

義郎　お前に言われる筋合いは無い。

美紗　お兄ちゃん。

康介　じゃ。

康介、上手へ去る。

義郎 康介に見合いの話をしたのか。
美紗 していないわよ。
義郎 じゃあ何だ、あの言いかたは。
美紗 お兄ちゃんもあれで心配してるのよ。だからこの間の見合いも。
義郎 お前の頼みどおり、見合いはした。だからそれでいいだろ。
美紗 お見合いはするだけじゃ駄目なの。向こうの天野さんだって好意的だったじゃない。
義郎 向こうも付き合いで、愛想よくしてくれてただけだ。本気にすることは無い。

奥へ去ろうとする義郎。
奥から村雨がやってくる。

義郎 うわ。
村雨 やった。ここだ。
美紗 村雨さん、どちらに？
村雨 女将さん呼びに行っただつもりが、迷ってしまったて。

土肥垣が上手からやってくる。

土肥垣 みっちゃん。お風呂つてどこだっけ？
美紗 また、迷ったの？
土肥垣 だって、この旅館、建て増しすぎ。
村雨 そうですよね。
土肥垣 あなたも？
村雨 ええ。だって、階段昇って二階に上がったと思ったのにすぐ庭があつたり。あれ？ いつの間に一階？ って。
土肥垣 そうそう。他にも、廊下が斜めに交差してたりね。
村雨 そうそう、それがね。
義郎 すみません。
村雨 あの、この方は。
義郎 当旅館の主人です。
村雨 あら。じゃあ、女将さんの？ へえ…
美紗 私の父です。
村雨 あ。そう。そうよね。そうそう。

恩田原と芳枝が下手から戻ってくる。

芳枝 あら。

義郎 え？

芳枝 お久しぶりです。もう覚えてらっしゃらないかしら。

義郎 ……木下さん？

芳枝 はい。

美紗 覚えてた。

義郎 何で突然。

芳枝 娘に会いに。

義郎 娘？

恩田原 私です。

義郎 先生が？　すると…

村雨 あの、何かお取り込み中でした？

恩田原 ええ、ちよっと。

村雨 じゃあ、今日のところは私出直してきますね。

村雨は資料を恩田原に渡す。

村雨 読んでおいてください。

恩田原 一応いただいております。

芳枝がカバンから本を出して村雨に渡す。

芳枝 これ、娘が書いた本なんです。

恩田原 お母さん、何でそんなもの。

芳枝 お土産に。

恩田原 お土産だったら自分の本にしなさいよ。

芳枝 私のは原作者がいる本ばかりだから、あんまり自慢にならないでしょ。

村雨 読ませていただきます。では失礼します。

村雨は下手へ去る。

美紗 何だっけ？

土肥垣 お風呂。

美紗 ああ、入るの？

土肥垣 私じゃなくてお兄さんが。

美紗 もう。自分でやったらいいのに。

土肥垣 でも、疲れてるみたいだから。

美紗 ちよつと行ってきます。

美紗と土肥垣は奥へ去る。

義郎 あの。

芳枝 はい。

義郎 恩田原というと。

芳枝 ええ、当時助教授だった恩田原と。

義郎 そうでしたか。結婚されたとは聞いてたんですが。

芳枝 すみません。連絡もしないまま。

義郎 いいえ。いつまで滞在予定で？

芳枝 二・三日かしら。

義郎 そうですか。では、ごゆっくり。

義郎は奥へ去ろうとする。

芳枝 あの。

義郎 はい。

芳枝 これを。

芳枝は義郎に本を渡す。

義郎 読ませてもらいます。では。

義郎は奥へ去る。

恩田原 二・三日って、いちいち面倒は見ませんからね。

芳枝 ちよつとくらい話す時間はあるでしょ。

恩田原 今忙しいのわかるでしょ。

芳枝 わかるわよ。

恩田原 お父さんから？

芳枝 お父さんは関係ないの。ここにも内緒で来てるし。

恩田原 またそうやって。「勘当だ！」って言い出したのはあの人なん

だからね。

芳枝 お父さんもちよつと言いきすぎたって。

恩田原 だからってお母さんがこうやって気を使って来ることないで

しよ。

芳枝 でもね君ちゃん。

恩田原 だからその呼び方止めてよ。もう子供じゃないんだから。
芳枝 でもね、君ちゃんが大人になっても、私達の子供に変わりは無
いのよ。

安西が上手から来る。

安西 ここだ。

恩田原 どうしたの？

安西 道に迷ってて。先生、この旅館、迷路ですよ。

恩田原 確かに複雑かもね。

安西 先生は迷わなかったんですか？

恩田原 何かね、そういうのは強いみたい。

安西 (芳枝に) こんばんは。

芳枝 こんばんは。

恩田原 私の母。

安西 はじめまして。

芳枝 こちらこそ。

安西 木下芳枝さんですよ。

芳枝 はい。

安西 訳本よく読ませてもらってます。

芳枝 ありがとうございます。

安西 私、安西です。先生にはいつもお世話になってます。

芳枝 こちらこそ、娘がお世話になってます。

恩田原 荷物置いてきたら。

芳枝 そうね。

恩田原 部屋は？

芳枝 「霞の間」。

安西 一人で大丈夫ですか？

芳枝 さつき女将さんに道順聞きましたから。

安西 でも迷路ですよ。

芳枝 大丈夫ですよ。

芳枝は上手へ去る。

恩田原 あの人もあんまり迷わないのよね。

安西 遺伝ですか。

恩田原 かしら。でも、あなた、しゃれた方位磁針持ってなかった？
あ、でも建物の中じゃ意味ないか。

安西 あれ、捨てちゃいました。

恩田原 壊れたの？

安西 いいえ。あれ、もらったものだったんです。

恩田原 ……雄次郎から？

安西 はい。

恩田原 そっか。

安西 すみません。

恩田原 私に謝る事じゃないでしょ。

安西 でも。

恩田原 あなたと付き合うずっと前に私達は別れてたし。

安西 先生に「やめた方がいい」って言われてたのに、私、聞かずに

……そのくせ結局……

恩田原 いいじゃない。あんな無責任男。教え子に手出しておいて、

あんな。別れてよかったと思うよ。

安西 ……

恩田原 コーヒー冷めちゃったわね。入れなおしてこよっか。

安西 私はこのくらいが。

恩田原 そっか、猫舌だ。……私はもらってくる。

恩田原、席を立つ。

安西 先生。

恩田原 なに？

安西 部屋に戻る時は連れてってくださいね。迷いそうなんで。

恩田原 わかった。

恩田原、奥へ去る。

安西は冷めたコーヒーを飲む。

康介が上手からやってくる。

康介 あれ？

安西 お客さん？

康介 え？

安西 女将さん、呼んできましたよか。

康介 いいよ。俺、この人間だから。

安西 そうですか。従業員の方？

康介 まあ、そんな感じ。

安西 私は猿の研究で来てる学生で。

康介 じゃあ、さっきの先生の。
安西 ええ。先生の研究室で。
康介 へえ。学生っていうと、二十二。
安西 院生なんです、二十四です。
康介 妹の四つ下か。
安西 ひよっとして、女将さんのお兄さん。
康介 そう。東京で俳優やってるんだ。
安西 へえ。
康介 ……映画とか、好き？
安西 いえ、あんまり観ないんで。
康介 そうか。……じゃあ、趣味は？
安西 ……猿を少々。
康介 サル……ああ。

村雨が上手から来る。

村雨 あれ？　ここは……
康介 先生。お待ちしておりました。どうぞ。
村雨 はい？

暗転。

△二場▽

明かりがつく。
大潮当日。夜。
前場と同じ休憩室。
下手にあつた荷物が開けられ、パソコンなどの機材が設置されている。
美紗と土肥垣がそのパソコン画面を見ながら座ってお茶をすすっている。

土肥垣 まだ恋ってわけじゃないんだけどね。
美紗 でも、あんまりお薦めはできないな。
土肥垣 うん。

二人はお茶をすする。

土肥垣 でもね、恋は理屈じゃないから。

美紗 里美って、恋に恋するタイプでしょ。

土肥垣 そうかなあ。

美紗 そうよ。昔っから。

土肥垣 ちゃんと男の人と付き合ったこともあるよ。

美紗 そうじゃなくって。いつも恋をしてる感じっていうか。

土肥垣 いつもって、軽い女みたいじゃない。

美紗 そんなこと言っていないよ。

土肥垣 それに私のはほとんどが片思いで終わっちゃうんだから……

お茶をすする土肥垣。

美紗 ……でも、片思いしてる時の自分って、切なくていじらしいって思ったりしない。

土肥垣 そう。

美紗 そうでしょ。

土肥垣 前、履歴書を書くとき考えたの。

美紗 え？ なに？

土肥垣 書こうと思ったのよ。特技の欄に「片思い」って。

美紗 ……書いたの？

土肥垣 書くわけないでしょ。

土肥垣がお茶をすする。

美紗もお茶をすする。

土肥垣 みっちゃんは？

美紗 え？

土肥垣 恋。

美紗 ああ。私のは、片思いじゃないから。

土肥垣 ……会ってるの？ 最近。

美紗 ……だから、こんな田舎に引っ込んでる場合じゃないのよ。

義郎が奥からやってくる。

休憩室を覗き込んでいる。

美紗 何？

義郎 いや。あ、厨房の片付け終わった。
美紗 うん。別に報告してくれなくっても。

義郎 テレビ、ついたんだ。
土肥垣 今、先生がカメラの調節に行っていて、私たち見張りなんですよ。

義郎 見張り？

美紗 画面に猿が映ったら、その画面のカメラをズームするようになって。

義郎 へえ。

パソコン画面を見ている義郎。

美紗 木下さんはまだ原稿書いてるみたいよ。

義郎 なんで俺に報告する？

美紗 そうかなって、思ってた。

土肥垣 原稿って、いよいよ缶詰？

美紗 書き上げた訳本のあとがきに直しが入ったらしくって。

土肥垣 へえ。

美紗 お父さん。

義郎 別に関係ないからな。

美紗 今、時間ある？

義郎 なんだ？

美紗 ちよつと見張り代わって。

義郎 え？

土肥垣 でも、操作の仕方がわからないんじゃないんじや。

美紗 マウス使えば大丈夫だから。

義郎 これだろう。見りゃあわかる。

美紗 で、そこにある矢印の

義郎 見ればわかるって言ってるだろう。

美紗 そう。じゃあ、お願いね。私たち部屋に居るから。

義郎 おお。

美紗と土肥垣は奥へ去る。

残された義郎はパソコンなどの機材を見ている。

義郎はパソコンに触ろうとするが、やめる。

美紗と土肥垣が去った奥の様子を伺う。

上手の様子も伺う。

恩田原が下手から来る。

義郎 あ。

恩田原 あれ？ 女将さんたちは？

義郎 ちよっと、部屋の方に。

恩田原 見ておいてって、頼んだのに。

義郎 先生。

恩田原 はい。

義郎 私が代わって見張りを頼まれてたんです。

恩田原 そうなんですか。ありがとうございます。でも今、どこかに

行かれるところだったのでは？

義郎 いえ。そんなことは。……ちよっと運動をしていただけで。

義郎は運動をする。

恩田原 ……

義郎 先生。

恩田原 はい。

義郎 カメラの調子は大丈夫だったんですか？

恩田原 ええ。今から見ます。

恩田原はパソコンの前に行き、操作する。

義郎 あ、変わった。

恩田原 さっきの画面は一階半のトイレに設置させていただいたメイ
ンカメラのもので。で、これが今、向きを固定してきたカメラで。

義郎 ああ、いくつも設置して見張るんですね。

恩田原 ええ。浅瀬を渡るんだとは思いますが、どういうルートを
取るかはわかりませんからね。全部で六台取り付けました。ほら。

話しながらカメラの切り替えをしている恩田原。

義郎 先生！

恩田原 はい？

義郎 さっきのカメラに人影らしいものが。

恩田原 まさか。

義郎 あ、この場合「猿影」になるんでしょうか。

恩田原 そうですね。

義郎 ほら、この辺りに「猿影」が。

恩田原 もう渡ってきたのかも。

恩田原はパソコンを操作する。

義郎 ああ、こうやってズームするんですね。

恩田原 ええ。これですね。どうやら、また二匹のようです。

義郎 というと、つがいですか。

恩田原 いえ、この場合オス・メスではなく……

二人はパソコン画面を見ている。

義郎 ……先生。これは……

恩田原 ええ。……猿影ではなく人影でしたね。

義郎 ……先生。

恩田原 はい。

義郎 これ、私たちのぞきになりますかね？

恩田原 ですかね。

芳枝が上手から来ていて、二人を見ている。

芳枝に気付く恩田原と義郎。

恩田原・義郎 わあ！

芳枝 どうしたの？

恩田原 いや。カメラの調子をちよつと、ね。

芳枝 何か、怪しいわよ。

義郎 そんなことありません。

恩田原 それより原稿は？

芳枝 今、康介さんにファックスしてもらってる。

恩田原 ファックス？パソコンは？

芳枝 仕事になると思わなかったから、持って来てないわよ。

恩田原 言えば私の貸したのに。

芳枝 いいわよ。今日のは「訳者のあとがき」だから。こういうのは

画面眺めてるだけで結局手書きしちゃってるんだから。

恩田原 そう。

芳枝 訳すのは慣れてるからパソコンでいいんだけどね、時々こうや

って自分の言葉で書かなくちゃいけないでしょ。そっちは苦手。ほ

んと、あなたのこと尊敬しちゃうわよ。

恩田原 私だって小説書いてるわけじゃないんだから。

義郎 本、読ませてもらいました。

恩田原 ありがとうございます。

義郎 五百万年前のアフリカですか。大陸から切り離されてしまった島の猿が、食べるものを求めて海に入っていたことから、人間への進化が始まる、という。

恩田原 ええ。

義郎 本当に、あの猿ヶ島みたいな状態が昔々にあつたわけですね。

芳枝 私も、そう思ったんですよ。あの島の猿達も、食べ物が減って、浜辺で海藻を食べ始めたんですもの。

義郎 そうですね。

恩田原 そして、海のものを食べることによって、脳の発達の仕方にも変化が出る。

義郎 あ、知ってます。魚の目玉食べると頭よくなるっていう。ドコサイクダエイチャンとかいう。

恩田原 ドコサヘキサ塩酸。

義郎 そうそう。やっぱり海のもの食べないと駄目なんですネ。人間になれないんですネ。

恩田原 でも、まだそこまでの確証はありませんから。

義郎 そうなんですネ。

芳枝 そんなに慎重になって。もっと書いても大丈夫なんですよ。

恩田原 そうは言っても、私も学会での立場もあるんだから。

義郎 学会は大変なんですネ。

恩田原 古い人たちは自分たちが今まで大事にしてきた学説を脅かすような意見には理不尽なほど厳しくあたります。

義郎 はあ。どこの世界にもありますよ。そういうことは。

芳枝 でも続編書くって。

恩田原 あれは皮下脂肪の話で。

義郎 何ですか？ それは。

芳枝 猿の仲間、毛が無かったり、皮下脂肪があつたりするのは人間だけなんですって。

義郎 へえ。え、猿は皮下脂肪ないんですか？

恩田原 脂肪は蓄えられても皮下脂肪ではないんです。

義郎 はあ。うちの美紗なんか、いつも気にしてるけど、皮下脂肪あつての人間なんですネ。ははは。

芳枝 ははは。

恩田原 ははは。できればバランスよく付いてほしいんですけどね。

義郎 ……すみません。……で？

恩田原 哺乳類の中で見てみると、毛が無く、皮下脂肪がある動物と

いうのは、クジラ、イルカ、アザラシ、ジュゴン、

義郎 ひよつとして海の動物、ということですか。

恩田原 そうなんです。

義郎 なんか面白そうじゃないですか。書いてくださいよ。

恩田原 だから、それはまだちよつとデータが少ないかなって。

芳枝 大丈夫よ。

恩田原 ならお母さん書いたら？

芳枝 だから私は、ねえ。

義郎 そうですよ。木下さんだって詳しいんですから、書けるんじゃないんですか？

芳枝 私は仕事柄、いろんな人の本読んで知ってるだけで、専門家じゃないですから。

義郎 いえ、専門家でない人が書いた本の方が、我々素人にはわかりやすいこともありますよ。

芳枝 そうですかねえ。

義郎 ええ。書いてくださいよ。

芳枝 そんな、ねえ。

恩田原 もう暇なんだよね。

芳枝 暇って言うっても、来週また次の本の打ち合わせが。

恩田原 じゃなくって、今。

芳枝 今？

恩田原 うん。

芳枝 原稿も送ってもらったし。

恩田原 じゃあ、見張り頼む。

芳枝 見張り？

恩田原 記録書式の用意をしておきたいんで。

芳枝 いいけど、見張りって、何すれば？

恩田原 詳しくは岩井さんに聞いて。

恩田原、上手へ去る。

残る芳枝と義郎。

義郎 操作方法を、教えましょうか？

芳枝 お忙しいんですか？

義郎 いえ。

芳枝 だったら、二人で見張りしてればいいんじゃないですか？

義郎 そうですね。

間。

義郎 本当にしつかりした優秀な娘さんですね。

芳枝 ええ。でも、岩井さんもりっぱな子供さん達で。

義郎 いえ、お恥ずかしい。娘はよく働いてくれるんですが、息子がどうもあんなんで。先生と同じ年だとは思えないでしょ。

芳枝 え？ 同じなんですか？

義郎 ええ、三十三だっておっしゃってましたから。

芳枝 ……そうですね。同じくらいですね。でも息子さんも、よく働いてますよ。さっきもファックスしてくれたり。

義郎 ああ、あれはただお調子者なだけです。全く誰に似たんだか。

芳枝 失礼ですけど、血は繋がってらっしゃるんですよ。

義郎 ええ、そりゃあ。

芳枝 だったら、ねえ。

義郎 ……しかし、妻も私もどちらかというところ、地味な方で。

芳枝 調子に乗る環境になかっただけです。

義郎 環境？

芳枝 実感できないかもしれませんが、子供は二人の親からしか遺伝

情報をもらえないんです。

義郎 まあ、そうですね。

芳枝 そして、両親からもらったもののうちどちらか「生きていくのに有利」な方を使っているところばかりもらえてるってわけですか。

義郎 親のいいところばかりもらえてるってわけですか。

芳枝 そうですね。

義郎 ……待ってください。そうすると、ひょっとして、必ず子供の方が親より優秀になることに？

芳枝 ええ。でも環境によって使えるものと使えないものがありますから。

義郎 ああ、それでさっきの調子に乗る環境に無かったという話に。

芳枝 はい。

義郎 ……待ってください。では、私の時に使い道のなかった「お調子者の血」が、あいつが生きていくのに必要になったから、今使っている、ということになるんですか？

芳枝 「遺伝の法則」上は、そうなりますかね。

義郎 うくん。

芳枝 あまり悩むこと無いですよ。生きていくのにどう「有利」なのか、本当のところは私たちにはわかりませんから。

義郎 じゃあ、誰が「有利」という判断を？

芳枝 自然界の神様が。

芳枝は上空を指す。
義郎も上空を見る。

芳枝 少なくとも私たちじゃありませんよ。

義郎 でも、親より子供のほうが優秀になって、「生きていくのに有利な方法」は神様しか知らなくて。それじゃあ、私たちは子供たちに何も言えなくなるじゃないですか。

芳枝 子供も神様じゃありませんから。私たちは私たちが小言でも言っちゃえばいいんですよ。

義郎 開き直って、ですか？

芳枝 そうです。子供さんたちに小言、言ってますか？

義郎 どうでしょう。言っていないかもしれないかもしれません。息子はたまにしか顔合わさないし。娘は、私からより、向こうからいろいろ言われちゃうし。

芳枝 あら。それはそれでうれしいことじゃありません？ しっかりしてて。

義郎 そうでもないですよ。最近は再婚しろってうるさくって。

芳枝 再婚。

義郎 ええ。先日も無理やり見合いをさせられて。

芳枝 あら。自分の方こそ、そろそろ恋人くらい作ればいいのに。

木下 いますよ。恋人。

義郎 え？ そんなこと言っていました？

木下 見ててわかりますよ。

義郎 見ててって。そうですか？

芳枝 観察してると何となくわかります。

義郎 そういえば、恋をするとキレイになるっていいですね。

芳枝 ええ。

土肥垣が下手からやってくる。

土肥垣が下手からやってくる。

義郎 ……キレイになったのかなあ。

土肥垣・義郎 あ。

間。

土肥垣 失礼しました。

土肥垣、下手へ去る。

義郎 何か勘違いされてしまったような。

芳枝 大丈夫ですよ。ただの年配者の会話ですから。

義郎 そうですかねえ。

芳枝 ええ。娘達ならいざ知らず。

義郎 そうですね。しかし娘さん、よく似てますよ。木下さんに。い

や、恩田原さんに。

芳枝 木下、でいいですよ。

義郎 そうですか。あの知的なところ、というか。さっきの猿の話している時なんて、何か懐かしい気持ちになりました。

芳枝 あの時はお互い若かったですからね。

義郎 今となつては、いい思い出になってます。

芳枝 本当に？

義郎 はい。

芳枝 よかった。

村雨が恩田原の本と紙を持って下手からやってくる。

村雨 あの、先生は？

義郎 ええっと。

芳枝 部屋じゃないかしら。

村雨 部屋というと？

義郎 「さざなみの間」です。

村雨 わかりました。

義郎 道順わかりますか？

村雨 昨日女将さんから、旅館内の地図をもらいましたので、大丈夫です。

村雨は手にした紙を見ながら上手へ去っていく。

芳枝 岩井さん。

義郎 はい。

芳枝 今更ですけど、あの時はごめんなさい。

義郎 そんな昔の事を。

芳枝 でも。

義郎 さつきも言ったように私にはいい思い出になってますから。
芳枝 そうですか。私はね、きつとずうっと引っかかってたように思
うんです。だから、ちゃんと謝った方がいいのかなって。
義郎 もういいんですよ。こうして再会が出来たんですし。
芳枝 ありがとうございます。
義郎 お互い大きな子持ちですけど。
芳枝 そうですね。

康介が奥からやってくる。

康介 先生。

芳枝 先ほどはファックスをありがとうございます。
康介 そのファックスなんですが、早速こんなものが。

康介は手にしていたファックスを渡す。
ファックスを読む芳枝。

芳枝 速いわね、谷本君は。

康介 先生の原稿に文句つけてるんですか。

芳枝 文句だなんて。また直し。

康介 どうします？

芳枝 そりゃあ、書き直すわよ。

康介 わかりました。じゃあ、また部屋にコーヒーをポットで。

芳枝 お願ひします。

康介 了解。

康介、奥へ去る。

義郎 何を張り切ってるんだ。

芳枝 頼もしいじゃないですか。

義郎 そうですかねえ。

芳枝 それでは、そういうことなんで。

義郎 いえ、お仕事ですからね。

芳枝 すぐ書き直しちゃいますんで、そうしたらまたお話の続きを。

義郎 はい。

芳枝は上手へ去る。

残った義郎。

突然、休憩室の電灯が点滅する。
驚く義郎。天井を見る。

義郎 もう、寿命だな。取り替えなきや。

義郎は立ち上がったて去ろうとするが、パソコン画面を見て去れない。

電灯が安定する。義郎座る。

再び電灯が点滅する。義郎、立つが迷う。

電灯は安定する。

安西が大きな封筒を抱えて下手からやってくる。

安西 あれ。

義郎 いいところに来てくれました。見張りを頼めませんか？ 私、ちよつと電灯の替えを取りに行きたいので。

安西 はい。先生は？

義郎 部屋に何か用意をしに。もう戻ってくると思いますよ。

安西 そうですか。

義郎 えつと、パソコンの操作は。

安西 わかります。うちの大学のものなんで。

義郎 そうですね。では。

義郎は奥へ去る。

安西はパソコンを操作している。

安西 これは！ ……人だ！ ……

恩田原が上手から来る。

恩田原 帰ってきた？

安西 はい。先生、これなんですけど。

安西は封筒から大きな写真を出し、恩田原に渡す。
それを見る恩田原。

恩田原 まさか…

安西 ええ、拡大してもらったんですが、やはり。

恩田原 本当にこの二匹が浅瀬を渡ってきたの？

安西 このリンゴ園の江田さんに聞いたんですが、いままで野生の猿は来てないらしいんです。で、この二匹が現れたのはちょうど一月前。

恩田原 どう見てもオスとメスね。

安西 ええ。

電灯が消える。

驚く恩田原と安西。

恩田原 何？

安西 そういえばさつきご主人が電灯を、つて。

二人はパソコン画面を見る。

恩田原 停電ではなさそうね。

安西 はい。

二人はパソコン画面を見ている。

恩田原 あれ、猿じゃないわよ。

安西 ええ、わかってます。これは違います。これは、さつき、あの。

暗い中、村雨が上手からやってくる。

電灯が付く。

村雨がいることに気づき驚く恩田原と安西。

安西 村雨さん。

村雨 あ、ここ休憩室。

恩田原 今日は何の用で？

村雨 先生。これ、読ませていただきました。

恩田原 それはありがとうございます。

村雨 いやあ、実に興味深いお話です。学校を卒業して二十年。いかに自分が科学とは無縁に過ぎすぎたのかと、反省しきりです。

恩田原 で、今日は何を企んでいるんです。

村雨 企むだなんて。私は先生の著書に感銘を受け、純粹に「今日起きるであろう現象」を目撃しようと馳せ参じたのであります。

恩田原 本当に？

村雨 はい。信じてください。
安西 信じていいんじゃないですか。

恩田原 そうね。

村雨 ありがとうございます。早速なんですが、この本にサインを。
恩田原 え？

恩田原は村雨から渡された本にサインをする。

安西はパソコンのところに行く。

村雨はテーブルの上の写真を見る。

村雨 この猿は？

恩田原 一月前、浅瀬を渡ってきた猿です。江田リンゴ園にいるって聞いて写真を借りて来たんですよ。

村雨 ああ、あの男同士の。

恩田原 それが、実はオスとメスだったんですよ。

村雨 へえ。じゃあ、新天地を求めてやってきたアダムとイヴですね。するとさしずめ、江田リンゴ園はエデンの園。

電灯が消える。

村雨 あ。

安西 先生、第二カメラの首が落ちてきてます。

恩田原 また？

安西 行ってきましょうか。

恩田原 いいわ。私が行って来る。

安西 でも一人じゃ。

村雨 では、お供します。

恩田原 いえ、そんな。

安西 二階のベランダですから、人はいたほうが。

恩田原 そうね。来ていただけます？

村雨 はい、喜んで。

恩田原と村雨は下手へ去る。

安西は残ってパソコンの操作をしている。

康介が上手から来る。

康介 こんばんは。

安西 こんばんは。

康介 どうしたんですか？電氣も付けずに。
安西 いえ、電灯が切れてるみたいで。
康介 え？

康介はスイッチをカチカチと触る。

康介 本当だ。替えの電灯持ってこなきゃ。

安西 さっき取りに行きましたよ。お父さんが。

康介 そう。まあ、今日は満月だから真っ暗って訳じゃないしね。

安西 ええ。

康介 ……満月の夜に猿が海を渡ってくるなんて、ちょっとロマンティックだよな。

安西 そうですね。

康介 でも、何で満月なんだろう。猿もお月見してたりして。

安西 地球上の生物のバイオリズムは月に影響されてるらしいんです。

康介 バイオリズム。

安西 大潮の時に、浜辺に卵を生みに来る魚やカニなんかいたり。

康介 ああ、海の生き物はやっぱり潮の満ち干きに敏感なんだね。

安西 陸の生き物でもそうですよ。人間だって出産が満月の時に多か
ったり、妊娠期間がちょうど月齢でいう九ヶ月間だったり。そうそ
う、女性の月経周期の平均も、月齢の一ヶ月にあたる二十九・五日
だったり。……あ、すみません。変なこと言っちゃって。

康介 いやいや。あるよね。ほら、満月見ると狼男になったり。

安西 それは、迷信です。

康介 そうだよな。

安西 でも、満月や新月の時って人間も精神が高ぶって落ち着かなく
なったりするらしいですから、案外そんなところから出てきた話な
のかもしれないね。

康介 そうだね。実際狼になりたい時って

土肥垣が上手からやってくる。電灯のスイッチを付ける。

電灯が付く。

安西・康介 あ。

土肥垣 あ。

土肥垣はスイッチを切る。

電灯は消える。

康介 ……何で消すの？

土肥垣 消してたんじゃ。

安西 さつきから電灯がおかしくって、ついたり消えたりするんですよ。

土肥垣 そうですか。

間。

康介 電灯付くなら、付けとく？

安西 そうですね。

土肥垣 はい。

土肥垣はスイッチを入れる。
電灯は付く。

康介 親父が替えの電灯取りに行ってるらしいんだ。

土肥垣 そうですか。……もうすぐなんですよ？

安西 ええ。もう映像記録は撮り始めてます。

土肥垣 やっぱり満月なんですね。猿は満月の日が大潮だって知ってるのかしら。

康介 地球上の生き物はね、月の影響を受けてるんだ。だから満月も知ってるし、大潮だって

土肥垣 あ、カニや魚って卵産む時、潮の満ち干きを知ってるって言いますね。

康介 え、知ってるの？

土肥垣 ええ、知ってるらしいですよ。そういうことじゃないんですか？

康介 そう、そのとおりに。でね、人間もそうなんだって。例えば月経周期が

土肥垣 やだ、お兄さん。

康介 え？ いや、あの。ねえ、安西さん。

安西 例えば、一日は二十四時間あるじゃないですか。これは太陽の周期で決まっています。でも、人間の体内時計は二十四・八時間で動いてるんですって。

康介 そうすると、一日一時間くらいずつずれてくことになるんじゃない？朝起きる度に一時間ずつ早くなる？遅くなる？

安西 まだ一日経ってないのに朝が来る感じですね。

康介 それで朝が眠いんだ。
安西 だから、朝日を浴びて体内時計を修正するんです。人間はずつと真つ暗な洞窟みたいなところに住んでると、二十四・八時間で行動するようになるんです。
康介 それも月に関係してるの？
安西 はい。月は二十四・八時間で地球を一周してるんです。
康介 それって、すごくない。
安西 人体の八十%を占める水も、月の影響で満ち干きしてるんじゃないかって。だから

電灯が消える。

康介・安西・土肥垣 あ。
康介 ほら、ね。
土肥垣 ええ。

波の音。

三人は月を見る。

安西 月があつたから、潮が満ちたり干いたりして、ただの大きな水溜りだった「海」が掻き混ぜられて生命が誕生し、進化した。そして私たち人間も生まれた。
土肥垣 そうなんですな。
康介 そうやって、この猿も進化するのかなあ。
安西 どうでしょう。

土肥垣は康介を見ている。
康介は安西を見ている。
安西は月を見ている。

土肥垣 電灯、遅いですね。
康介 いつ、取りに行ったの？
安西 十分くらい前かしら。
土肥垣 ちよつと見えます。
康介 いいよ。置いてある場所がわからないんだろうけど、そのうち来るだろ。
土肥垣 じゃあ、みつちゃんに聞いてくる。おじさんより知ってるから。

康介 ああ、そうだね。
土肥垣 じゃあ。
安西 お願いします。

土肥垣は、去る。

康介 そろそろなの？

安西 今夜一番潮が干くのは十一時十二分なんで。

康介 もうすぐ十一時だよ。いよいよだね。

安西 ええ、でも本当に今夜起きるのかはわかりません。

康介 そうなの？

安西 あくまで、推論なんで。

康介 じゃあ、これだけやっても結局、何も起きないってことも？

安西 ええ。自然界の出来事は、私たちのシナリオどおりには進みませんから。

康介 うん。

間。

康介 人間界の出来事も、シナリオどおりにはいかないよ。

安西 ええ。

康介 それも、何故か自分のシナリオどおりには。

安西 実感もってますね。

康介 一応さ、俳優やってるって言うけど、そんなにうまくいかなかったさ。

安西 そうでしょうね。特にそういうお仕事は。

康介 時々こうやって帰省してる時なんかね、ふと「やめちゃおうかな」なんて思ったりして。

安西 じゃあ、やめたらいいじゃないですか。

康介 え？

安西 ……すみません。こういう時って普通励ますものですよね。

康介 いいよ。普通がどうなのかなんて知らないし。

安西 でも、人には向き不向きってありますから。私はお兄さんが何に向いてるかわかりません。でもなんかあいう仕事って、向き不向き以外のいろんな要素が関わってきたりするんじゃないかって。ほら、その

康介 そう。そうなんだよ。それこそシナリオどおりにはいかない。
安西 やっぱり。

康介 そのとおりに……。あのさ

電灯が付く。

康介・安西 あ。

康介と安西はスイッチの方を見る。
スイッチのところには誰もいない。

康介 いきなり付くと、驚くよね。

安西 いきなり消えても、驚きますしね。

康介 うん。……。あのさ

芳枝が原稿を持って上手から来る。

芳枝 康介さん。

康介 はい。

芳枝 原稿できたんですけど。

康介 早いですね。……。ファックスしておきますか？

芳枝 お願いします。

康介 はい。わかりました。じゃ、また後で。

康介は原稿を受け取り奥へ去る。

安西 お仕事ですか？

芳枝 訳本のあとがきを。

安西 ああ。先生も苦労してましたよ。

芳枝 あの子が？

安西 書きたいことは本編に書いたし、あとがきが変に予告編になると、どっからツッコミくるかわからない、って。

芳枝 偉い方々から？

安西 はい。

芳枝 あの子らしいわね。あなたも研究職を？

安西 私はどちらかというと、木下さんみたいな仕事の方を目指してるんです。

芳枝 翻訳？

安西 翻訳っていうか。私は先生みたいに一つの事に集中するっていう点が欠けてるんですよ。いろんなものに興味が行っちゃって。人

類の起源を探りながら、潮の満ち引きに影響されたり、聖書の記述が気になったり。

芳枝 聖書？

安西 いえ。

芳枝 サイエンス・ライター。

安西 そんな感じになれたらなって。

芳枝 いいんじゃないの。もし本気なら、相談にのってあげましょうか。

安西 本当ですか？ ありがとうございます。

安西はパソコン画面に向かう。

安西は首筋を気にする。

芳枝は安西を見ている。

芳枝 あら、にきび？

安西 ええ。最近ちょっと肌荒れで。不規則な生活してますから。

芳枝 妊娠にきび。

安西 え？

芳枝 そこにできるの、めでたしにきびって言わない？「想い、想われ、振り、降られ、めでたしめでたし」。

安西 いえ。

芳枝 まあ、冗談の類なんでしょうけど。でも実際妊娠してみるとリンパ腺の走ってるところにデキモノって出来やすいのよ。「想い、想われ、振り、降られ、妊娠」。

安西 ……

芳枝 やだ。まさか、心当たりとかあるの？

安西 いいえ。

芳枝 ……まだ学生なんですよ。

安西 近くなったら休学するつもりです。

芳枝 やっぱりそうなんだ。

安西 ……

恩田原は下手口のところまで来ているが、休憩室に入れない。

芳枝 あの子は知ってるの？

安西 言えないんです。

芳枝 どうして？

安西 相手は、先生が昔付き合ってた人で。

芳枝　でも今はあなたと付き合ってるんでしょ。

安西　いえ。今はもう……

芳枝　……産む気？

安西　はい。

芳枝　だったらいずれ、

恩田原は休憩室へ入ってくる。

安西　先生。

恩田原　どういうこと？

安西　すみません。

恩田原　何で、そんな大事なこと話してくれないの。

安西　これは私の問題なんで。

恩田原　そうだけど。でも……休学とか、そういうことが……いや、そんなことは後でもいいのよ。……だって、別れたんじゃ？

安西　はい。

恩田原　だったら。

安西　だって。

恩田原　より戻せないの？

安西　無理ですよ。

恩田原　どうして。

安西　先生だって、別れて正解だって。

恩田原　妊娠したら話は別でしょ。

安西　どうしてですか？

恩田原　話せば雄次郎だって、考え直すわよ。

安西　いいえ。もうダメになったものは、ダメなんですから。

恩田原　そんなことないわよ。

安西　子供のためだけに、より戻せっていうんですか。

恩田原　まだ学生なんだし。生活はどうするの。

安西　先生は、産むなっていうんですか？

恩田原　だから、雄次郎と話し合っ

安西　休学して、一旦実家に戻ります。

恩田原　意地張らないですよ。

安西　先生には本当に迷惑かけてしまいますけど、もう決めてるんです。

恩田原　でも、片親だけじゃ、大変でしょ。

安西　片親でも大丈夫です。

恩田原　そんなことわかんないでしょ。

安西 私も母親だけで育ちましたから。

間。

安西 すみません。

安西は上手に去る。

芳枝 君ちゃん……

間。

恩田原 そうよね。

芳枝 え？

恩田原 子供が出来たからより戻せっていうのは軽率なアドバイスよね。お母さん達はどうかだったの？

芳枝 私達？

恩田原 「出来ちゃった結婚」だったんでしょ。後悔してない？

芳枝 後悔するわけ無いでしょ。

恩田原 お父さんは？

芳枝 お父さんだって。

恩田原 どうかしら。あんな外面ばかり気にする人にとって、「出来ちゃった結婚」なんて嫌だったんじゃないの？

芳枝 そんな言い方……

恩田原 お母さんだって苦労したでしょ。あんな堅物相手に三十五年。雄次郎だって、きつとあんな感じよね。そう考えると、よりなんか

戻さない方がいいのかもしれない。片親の方がまだ

芳枝 君枝。

恩田原 ……なに？

芳枝 ここへ来た時はまだ迷ってたけど、やっぱり話すわ。

恩田原 話すって？

芳枝 お父さんのこと。……お父さんとは、その「出来ちゃった結婚」ではないのよ。結婚する前にあなたは産まれてたの。

恩田原 そんな順番の事は重要じゃないでしょ。

芳枝 順番じゃないの。あの人は、あなたの父親になってくれるって言うてくれたの。

恩田原 そりゃあ、そう……：どういうこと？

芳枝 あなたとお父さんとはね、血は繋がってないの。わかっててお

父さんは……

恩田原 ちよつと待って。いきなりそんな話。じゃあ、私の本当のお父さんは？

芳枝 あなたのお父さんは、恩田原秀樹。

恩田原 そうじゃなくなつて。遺伝的な父親は？

芳枝 ……亡くなつたわ。

恩田原 そんな。

芳枝 だから、あの人があなただけに厳しくするのは、あなたが実の子じゃないからじゃないのよ。それだけは誤解しないで。そうじゃないの、そうじゃないんだけど。あなたたちお互い意地っ張りで、自分の主張引つ込めないんだもの。血が繋がって無くて、あなたたちこんなに似ちやうなんて。すごいわよね「環境」って。

間。

人の話し声が聞こえる。

美紗と義郎が奥からやつてくる。

美紗 まだ大丈夫そうじゃない。

義郎 いや、さつきはこれが点滅してな。ほら、ちよつと色が変わる。

美紗 そうね。でも、今日一日ぐらい持つんじゃないの？

義郎 そんなこと言つてもな、

美紗 仕方ないじゃない、替えの電灯無いんだから。

義郎 いや、無いわけじゃない。康介の荷物を運んだ時、確かに見かけたんだ。

美紗 で、今はどこにあるの？

義郎 それがわからん。

美紗 じゃ意味ないでしょ。

義郎 ……もう一回探してくる。

義郎は奥へ去る。

美紗 すみません、また消えるかもしれません。

芳枝 安西さんを見てくるわ。

芳枝は上手に去る。

残った恩田原と美紗。

美紗 どうかされました？

恩田原 いえ、ちよつと。
美紗 そうですか。

恩田原はパソコン画面のところへ。

美紗 電灯消えたら困りますよね。

恩田原 いえ、停電ではありませんから、何とか。

美紗 よかった。備品の管理は私がやってるんですけど、電灯は父がどこかに動かしちゃったらしくて。こんなことじゃ、いつまでたつても……

恩田原 旅館を出られるんですか？

美紗 ……いつかは、とは思ってるんですけど。

恩田原 働きに？ それとも結婚？

美紗 ……どちらも考えてはいるんですが。

恩田原 ここが心配で？

美紗 ええ。

恩田原 ひよつとしたらお兄さんがやってくれるかもしれませんよ。

美紗 できないですよ。自分は映画俳優だって言い張ってますから。

恩田原 でも、よく働いてる。

美紗 短期間だから続いているんですよ。

恩田原 そう？ 私には「仕事に飢えてた」みたいに見えたんだけど。

美紗 そう、も見えますね。

恩田原 いろいろ言ってるけど、向こうの仕事、行き詰ってるんじゃないの？

美紗 ええ。それはわかります。

恩田原 だから、ね。

美紗 どうですか、ね。

恩田原 現実にはわかってるはずよ。もう子供じゃないんだから。

美紗 子供ですよ。まだ。

二人は笑う。

土肥垣が上手から来る。

土肥垣 ……

美紗 どうしたの？

土肥垣 え？

美紗 元気がない。

土肥垣 そうか。

美紗 何かあった？
土肥垣 何もないから、元気もない。

土肥垣は椅子に座る。
間。

土肥垣 ねえ。

美紗・恩田原 え？

土肥垣 人は何で生きてると思います？

美紗・恩田原 え？

土肥垣 先生。

恩田原 私？ ……それは、哲学的な質問かしら？ 生物学的な質問かしら？

土肥垣 高校の時の理科の先生が言ったの。「生き物は何のために生きるのか？」って。

恩田原 えっと、それは、子孫を残すため？

土肥垣 ええ。

美紗 そう言っちゃあ、実も蓋もないわね。

土肥垣 じゃあ「人は何のために生きるのか？」

恩田原 えっと、そっちは哲学的な質問？

土肥垣 先生は言ったの。「生き物はすべて子孫を残すために生きてる。だから、人間も恋をするために生きてるんだ」って。

恩田原 それは、口説いてない？

土肥垣 その言葉を聞いて、私は恋に落ちました。

美紗 まさか、先生と、その…

土肥垣 ううん。やっぱり片思い。

間。

土肥垣 ちよつと外行ってくる。

土肥垣は下手へ去る。

恩田原 大丈夫でしょうか？

美紗 ええ。案外打たれ強いから。

美紗はテーブルの上の写真を見る。

美紗 この写真は？

恩田原 島から渡ってきた猿です。

美紗 ああ、あのオス同士の。

恩田原 いえ。オスとメスだったんです。

美紗 これ？

恩田原 ええ。

美紗 それはやっぱり、駆け落ち？

恩田原 と、いうんでしょうか？

美紗 さあ。私に聞かれても。

恩田原 そうですね。

美紗 デートにでも出かけたんじゃない。

恩田原 デート？

美紗 ええ。好きな猿同士で、海へ。

恩田原 ひよつとしたら、そんなことなのかもしれないね。

美紗 猿も恋をするために生きてるのかも。

恩田原 そういう言い方をすれば、生き物は全て恋をするために生きてるんですよ。

美紗 恋をしない生き物はいない？

恩田原 生物によって差はありますが、子孫を残すために生きています。としたら、いずれ恋をします。その恋が成就するかどうかはまた別問題として。

美紗 ……

恩田原 私、今、自分で墓穴掘っちゃったかな。

美紗 子孫を残せない生き物はどうなんでしょう。

恩田原 え？

美紗 生きてても意味がないんでしょうか？

恩田原 それは、哲学的な？

美紗 生物学的な。

恩田原 ……もしかして、女将さん？

美紗 私、出来にくいって。

恩田原 え？…それは…子孫が、という？

美紗 ええ。以前病院で言われました。

恩田原 ……それは…誰か知ってるの？

美紗 いいえ。

恩田原 彼氏も？

美紗 はい。

恩田原 えっと、そうすると、私はさっき変なこと言っちゃいました？

美紗 彼は結婚して子供がほしい、って言うてくれるんですけど。ど

う返事していいのか。

恩田原 ……世の中、どうして、こううまくいかないのかね。

村雨が上手から来る。

村雨 先生。

恩田原 すみません。気が付いたら後ろにいなかったの。

村雨 いいんですよ。私もちよつとよそ見してたのがいけなかったんですから。それより、カメラは大丈夫なんですか？

恩田原 すっかり忘れてました。

恩田原はパソコンで様子を確かめる。

村雨 忘れて何されてたんですか？

恩田原 いや、それは、いろいろと

村雨 はあ、……大変ですねえ。

カメラチェックをしている恩田原。

恩田原 大丈夫のようです。

村雨 先生！ これ！

村雨はパソコン画面を指す。

恩田原と美紗はパソコン画面を見る。

恩田原 これは……

美紗 里美……

パソコン画面には土肥垣が映っているようだ。

村雨 あんなどころに。何かあったんでしょうか。

美紗 何もないから、あんなどころにいるんでしょうね。

村雨 は？

恩田原 あ、そっち行くと人影が。

村雨 え？

恩田原 いえ。

安西が上手から来る。

恩田原 ……落ち着いた？

安西 ……ええ。

恩田原 単に、意地張ってるだけじゃないんだよね。

安西 はい。

恩田原 じゃあ、私は何とも言えないけど。

安西 すみません。

恩田原 でも、彼には言っておいたら？

安西 それは…

恩田原 あなたの決心も話してさ。どんな返事が返ってくるかはわからないけど。

安西 ……考えてみます。

恩田原 うん。あいつのことだから、ビビって腰が引けちゃうでしょうけどね。

安西 ええ。

恩田原 ……ねえ、人は何のために生きてると思う？

安西 え？

恩田原 いいや。また今度。

村雨 お取り込み中、すみませんが、先生。土井垣さんが。

美紗 また何かやらかしたの？

みんなはパソコン画面のところへ。

村雨 何か動き回ってるんです。

美紗 手、振ってる？

安西 島の方に何か。

恩田原がパソコンを操作する。

恩田原・安西・村雨・美紗 あ！

恩田原 どうやら、本物のようです。

安西 今回も二匹いますね。

美紗 またオス・メスなんですか？

恩田原 この映像だけではわかりません。

村雨 月明かりに照らされて、まさに幻想的な光景ですね。

恩田原 肉眼で確かめてくる。

村雨 わかりました。私はここで待機してます。

恩田原 お願いします。じゃあ行くわよ。

恩田原は安西を呼ぶ。
安西はお腹を押さえている。
電灯が消える。

恩田原 どうしたの？

美紗 安西さん？

安西 先生……

恩田原 まさか、大丈夫？

恩田原は安西を抱える。

美紗と村雨も手伝って、安西を長椅子に寝かせる。

安西はお腹を押さえている。

美紗 お父さん！

康介が奥から来る。

康介 どうした？

美紗 お兄ちゃんでもいいわ。車出して、病院まで。

康介 晩飯のサバか？

恩田原 子供が

美紗・康介・村雨 子供？

恩田原 いいから、早く。

康介 わかりました。玄関前にまわしておくから。

康介は下手へ去る。

安西 私のことはいいですから。

恩田原 何言ってるのよ。

美紗 すぐ車、来ますからね。

安西 先生、猿

恩田原 猿は後でいいから。

村雨 こっちのことは私たちに任せてください。

安西 猿が、

安西はパソコン画面を指差す。
皆、パソコン画面を見る。

村雨 先生。二匹じゃありませんよ。
恩田原 一体、何匹渡ってくるつもりなの？

波の音。
暗転。

△三場▽

明かりがつく。
大潮の次の日。昼。
誰も居ない休憩室。
芳枝がやってくる。
持っていたファックスを読んでいる。
義郎がやってくる。

芳枝 お世話になりました。
義郎 もう出発ですか。
芳枝 ええ。安西さんがもどいたら一緒に。
義郎 彼女、大丈夫なんでしょうか。
芳枝 退院の許可も出ましたから、大丈夫でしょう。
義郎 そうですね。
芳枝 どちらにしろ、私は今日中に帰らないと。
義郎 お仕事ですか。
芳枝 はい。ファックスのやりとりだけじゃあ。やっぱり会って話を
しないと。
義郎 そうですね。
芳枝 ……ここにも、来られてよかったです。いろいろ話も出来たし。
義郎 はい。
芳枝 娘にも。
義郎 娘さんにも？
芳枝 ええ。娘にもいろいろ話さなきゃいけない事があつたんです。
私達親子の問題なんですけど。今までは話さなくつてもいいんだつ
て、自分に言い聞かせていたんですね。
義郎 それで、話せたんですか？
芳枝 ええ。全部じゃありませんけど。

義郎 そうですか。……また、いらしてください。
芳枝 ええ、是非。
義郎 大したおもてなしも出来ませんが。
芳枝 いえ、充分ですよ。
義郎 ……あの

康介と安西が下手からやってくる。

康介 ただいま。
義郎 おかえり。
安西 お騒がせしました。
芳枝 出発は、ちよつと休んでからにしましょうか。
安西 私はもう大丈夫です。
康介 じゃあお昼だけでも食べていったら。
安西 え？
康介 なるべく栄養のあるものをさ。先生、急ぎます？
芳枝 いえ、大丈夫。
康介 じゃあ、そうしましょうよ。
安西 いいんですか？
義郎 ええ、いいですよ。
芳枝 じゃあ、私もお昼いただいてからにしようかしら。
義郎 はい。では急いで準備を。

義郎は奥へ去る。

安西 すみません。
芳枝 いいのよ。どうせ同じ方向だし。康介さんもお疲れさま。
康介 いやあ、病院で父親に間違えられてから、何か母性本能が目覚めたっていうか。
芳枝 母性じゃなくて父性でしょ。
康介 ああ、そうか。子供生まれたら、また来てよ。
安西 生まれる前にまた来ます。
康介 そう？
安西 先生もいるんで。
康介 ああ、そうか。
安西 それまで先生のこと、お願いします。
康介 任せてください。……あの
義郎の声 こうすけー。

康介 はーい。ちよつと行ってくる。

康介は奥へ去る。

芳枝 康介さん、張りきつちやって。

安西 本当に助かりました。

芳枝 それだけ？

安西 え？

芳枝 そうよね。私も荷物まとめてくるわ。

安西 はい。

芳枝は上手に去る。

残った安西は海を見ている。

恩田原が下手から来る。

恩田原 おかえり。

安西 すみません、途中で抜けることになっちゃって。

恩田原 いいのよ。こっちは村雨さんが協力的で。

安西 すっかり先生の信者ですね。

恩田原 まあ、助かってるけど。

安西 とところで、渡ってきた猿は？

恩田原 結局十一匹。これに先月の二匹が合流して十三匹。

安西 群れの分裂ですか。

恩田原 それはまだわからないわ。

安西 ひよつとして、来月も？

恩田原 うん。どつちにしろ、島はもう定員オーバーなんでしようね。

後で船出してもらって島に行ってくる。

安西 そういえば、先生。

恩田原 何？

安西 お兄さん、先生と同じ年だって信じてましたよ。

恩田原 いいじゃない、今更。留学してて大学入学年度が遅れたのが

幸いしたってことで。

安西 もう。しょうがないなあ。

恩田原 三十過ぎたら歳なんて自己申告で事足りるのよ。

安西 そうですね。年齢なんて関係ないですね。

恩田原 そうそう。

美紗が安西の荷物を持って上手から来る。

美紗 これでもいいんですか。

安西 ありがとうございます。

恩田原 他は？

安西 置いていきます。一段落したら、また戻って来ますから。

恩田原 あんまり無理しないでね。

安西 はい。

安西は海を見ている。

安西 ちよつとだけ残念です。

恩田原 何が？

安西 だって、あの島で何か起きてるんですよ。それを目に出来ないのかなって。

恩田原 昨日目撃したじゃない。

安西 そうですね。

美紗 私たちも目撃者になったんですね。

恩田原 ええ。

安西 すみません、木下さんにまで迷惑かけちゃって。

恩田原 いいのよ、あの人は。あれで結構喜んでるみたいだし。

美紗 今朝も言ってみました。「年寄り猿が長生きするのは、他の猿の子の面倒も見るためだ」って。

恩田原 あの人らしい言い訳ね。

安西 でも、寿命の長い動物ってそうですよ。普通は子供作れない体になつたらそこで寿命になっちゃいますから。

美紗 もう役目が終わつたってこと？

安西 ええ。結局生物は子孫を残すために生きてるわけですから。

美紗 そうですね。

恩田原 ……でも、子供を作れなくなった年寄り猿も生きてる。

安西 ええ。群れの中では他人の子供も自分の子孫って考えなんですし
ようね。

美紗 じゃあ、木下さんはそんな猿の考え方を？

恩田原 年寄りでなくつても、皆が皆、子孫を残すわけじゃないの。
群れの中ではいろんな役目があつて。群れとして他の猿の子供を育
てたり。それこそ新天地を探して海を渡る猿もいて。

安西 最初の二匹みたい。

恩田原 そう。だから、意味があるのよ、寿命が来るまでは。生き物
ってそういう風に出てくるの、自然界の神様によって。

美紗 自然界の神様に……

恩田原 うまく言えないけど、そんなところにヒントがあるのかな、
って。

美紗 ……はい。

安西 何のヒントですか？

恩田原 うん。だから、一人で育てるって意地張らないでってことかな。
な。

安西 でも、この子の親は私ですから。

恩田原 そうだけど、私たちは同じ群れの猿なんだから。

安西 ……はい。

美紗 猿、ですね。

恩田原、安西、美紗は海を見ている。

波の音。

— 幕 —